

幽霊の昇天をめぐる言説の構築：聖書を手がかりに読む西欧の他界観

著者	嶋内 博愛
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	3
ページ	21-34
発行年	2003-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001014/



幽霊の昇天をめぐる言説の構築 — 聖書を手がかりに読む西欧の他界観 —

The Discourse Construction of Ghosts

— The after life's representation in the west Europe, the Bible as clue —

嶋 内 博 愛

SHIMAUCHI, Hiroe

0. はじめに

ルール地方で20世紀初頭に編まれた伝承集に、以下のような話が収録されている。

ローンの司祭が、エアベリッヒのある病人の（告解の）ために呼ばれた。司祭を呼んだのは病人の2人の隣人たちで、彼ら2人と教会の寺男が随行した。一行が今日キュスター十字が立っているところまでやってくると、いきなり寺男が叫んだ。「司祭さま、燃える人が来る！」「祈り続けるのだ。そして進もう！」「司祭は答えた。燃える男が近づいてくると、司祭は祝福を与えた。すると、男が話し始めた。「この祝福を、ずっと長いこと待たなければならなかったんだ。まだ生きている頃、祝祭日に礼拝するのを怠けていたんだ。これで昇天できる。ありがとう。」そう言って、霊は消えた。¹（丸括弧内は筆者による。以下同様。）

夜道を歩く一行の前に突如として現れた

「燃える男」。その正体は、まぎれもなく死者、より正鵠を期して言えば幽霊である。生前犯した罪ゆえに昇天を許されず、現世を彷徨っていたところ、通りかかった司祭の祝福を受け、ようやく彼にも救済の時が訪れた。

「燃える男」に限らずとも、死者の救済に関する伝承は、少なくともヨーロッパに限定すればさほど珍しいモチーフではない。ただ、それらが伝わっていくにはいくつかの前提がある。たとえば、生前の行いによって、死後どのような目に遭うかが左右されるとか、あるいは、生者のとりなしが死者に影響を与えると信じられていなければならない。しかしもっとも重要なのは、死んだ後も“生き続ける”ことがあるという観念だろう。

実際、死者は死なない。生物として生命を終えても、「故人」という新たな地位を得て、当該社会の中にある程度の期間は居場所を確保し続けるからだ。人類学的見地からいえば、世界各地・各時代から類似した死者儀礼が報告されており²、それらを総合してみれば、この世を去った者が何らかのかたちで現世に影響を及ぼしたり、再び舞い戻ってきたりする

キーワード：歴史人類学、煉獄、幽霊

Key words : Historical Anthropology, Purgatory, Ghost

という発想は、普遍的なものだということがわかる。しかし、たとえば日本の祖霊信仰では、死んだ者（先祖）がこの世に舞い戻り、生者（末裔）と交歓するというように、ポジティブに解釈される。他方では、キリスト教や、輪廻からの解脱をいう仏教においてそうであるように、ネガティブな価値づけがされる場合もある。また、科学的に説明できない超常現象に対峙したとき、それが成仏できない霊のしわざであるとする民間信仰は、現代日本にも根強く息づいているなど、個別の事例を比較すれば、各々の間にはかなりの相違が見られる。死んだ者が現世に幽霊として出現するという「現象」は、生きている者のまなざしがあってはいじめて成立するという点で、語る側の世界観と密接にからみあっている。幽霊が「現象」というよりもむしろ現象に対する「説明」であるがゆえに、幽霊に与えられる社会的位置づけは、当然のことながら文化的に大きな差異が出てくるのである。幻想文学や怪奇小説・映画などにしばしば登場する生ける屍や幽霊たちは、そこではあたかも本当に実在し、生者を恐怖に陥れているかのように描かれるが、実際のところは、彼らを実在させているのはあくまでも記憶を受け継いでいく生者の側である点は、しっかりとここで確認しておかなければなるまい。確かに、ある人が「白い影が見える」「音が聞こえる」などと幽霊目撃について語るのを、筆者自身も実際に聞いたことがあり、現象を知覚している当人にしてみれば、白いの影の存在は現実以外のなにものでもありえないのだが、それでも、そこで見えた白い影からいかなる情報を切り出すかは、見る者の文化的脈絡に大いに依存する。

とはいえ、そこには少なからず共通点もある。

幽霊が出現するには、生者の中にならずその出現を感じたり告げたりする者がいなければならないという点だ。文化によっては専門訓練を受けた職能集団がそれにあたることもあるし、素人が突然開眼する場合もある。また、生者の周到な計画によれば、人は死ぬと生者の世界から一度分離され、通過儀礼を経た後、故人として再び統合される。そして彼／彼女にまつわる記憶が生者の間で薄れるに従って、徐々に、ついには完全に現世から放逐されることになる点も、通文化的にみられる観念といえる。

では、死んだ者はどんなときに幽霊となって現れると信じられるだろうか。たとえば、分離・統合過程に何らかの障害が生じてしまった場合、埋葬・墓参など必要な供養が行われていない場合などがこれにあたる。あるいは、一般的な儀礼が実施されたにもかかわらず生者に危害を及ぼす場合もある。こうしたことに対する説明原理として、周知のように、しばしば浮遊霊や怨念、祟りという伝統的な観念が引き合いに出されるが、それらが自発的に生者に働きかけてくることはない。というのも、説明原理とは、情報を切り取る側が知覚したと信じる現実を、「納得いくもの」に変換するためのコードでしかありえないからだ。

1. 歴史人類学からの幽霊研究

ヨーロッパ、とりわけ中世をフィールドとして「幽霊出現」に関して人類学的な考察を試みようとするとき、手がかりとして有用な資料は、大半が文字資料である。当時の宗教者が自らの「宗教体験」をつづった記録や、誰かが不思議な体験をしたという証言を宗教的に解釈ないし再編集し、布教に利用できる

かたちに第三者が脚色したものなどがそれに当たる。それ以外の文字資料としては、民間伝承も補助的にであれば充分利用できる。たしかに文章化された時期は近現代である場合がほとんどで、時代の特定が難しい場合が多いが、そのモチーフやテーマから、かつて信じられた幽霊が綿々と語り継がれてきたものと考えられる場合があるためだ。

しかし、文字を介さない造形表現となると、幽霊に関するものは、文字資料の豊富さと比べ量的にははるかに少ない。わずかに残る図像のほとんどは写本の挿絵で、筆者の知る限りでいえば、彫刻・彫像は存在しない。しばしば悪魔の眷属として造形化され、教会建築の一部にまで登場し、見る者にネガティブな価値観を植え付ける道具として利用された怪物たち“モンスター”とは対照的である。一説によると、出現する幽霊は、侏儒や狼人と同様、民衆の中に根強く残っている土着の信仰対象であったため、教会が図像化するのをためらったのだという³が、その当否は筆者には判断しかねる。

本稿においては、死者が現世に出現するという事態を、キリスト教の枠組みに取り込まれた、あるいは取り込まれようとしていた人々がいったいどのように語り、どのような説明を加えていたのかについて、そして現代のヨーロッパ文化にいかなる残滓が見られるかについて考察してみたい。

キリスト教において人は死ぬとどうなるのか。キリスト教創立期の宗教活動家たちが布教の根拠として重視した福音書には、死の後に何が起こると書かれているか。まず、その内容を確認することから始めよう。

2. 福音書における肉の復活：幽霊の不在

2.1 信じる者の復活

紀元2世紀前半にはほぼかたちが整ったとされるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書には、キリストが伝道の際に起こしたとされる奇跡が数多く記述されている。わけでも多いのが治癒奇跡で、そのうちもっとも奇抜なのが、死人を蘇生させるという奇跡だろう⁴。一例を見てみよう。

イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。会堂長の一人でヤイロという名の人に来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば娘は助かり、生きるでしょう。」そこでイエスはヤイロと一緒に外へ出て行かれた。(中略)イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。(中略)一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と3人の弟子だけを連れて、子供のいるところへ入って行かれた。そして、子供の手

を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。少女はすぐに起きあがって、歩き出した。もう12歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。⁵

ここでイエスは、呪文を唱えて死んだ子供を蘇生させるという奇跡を起こしている。屍が再び息を吹き返したのである。次の例でも、イエスは呪文を唱えて奇跡を呼ぶ。

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。⁶

「ヤイロの娘」のときには、遺体はまだ納棺されておらず、死んでからさほど間がなかったと類推されるが、ここに描かれている「ナインの若者」の場合は、すでに葬儀が始まっている。しかも、偶然の出会いであるはずな

のに、みごとに若者の肉体はふたたび命を得る。イエスの超人的な能力をさらに強調する話となっている。次に見る「ラザロ」の場合は、イエスの到着は若者のときよりもさらに遅い。

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。(中略)姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられるものが病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれで栄光を受けるのである。」(中略)ラザロが病気だと聞いてからも、なお2日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」(中略)イエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」(中略)さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに4日もたっていた。(中略)墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、4日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いを

いつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」こう言うから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。⁷

姉妹をして「もうにおいます」とまでいわせる生々しい屍を、イエスは蘇らせる。蘇った後も、手足を布で巻かれた姿はあまり気持ちのよいものではなさそうだ。それゆえ、すぐさま「ほどいてやって」と助け船が入る。いづれにしても、上記3例すべて、復活の際には肉体を伴っており、ヤイロ以外は、あたかも一度死んだという事実が全くないかのごとく普通の生者の生活に戻っていくさままで描かれている。

2.2 最後の審判と死後の世界

エジプトのミイラにまで遡らずとも、死後の生あるいは復活に備えての遺体の保存は、洋の東西を問わず信仰上の大きな関心事であった。キリスト教は肉体の保管にはまったくといってよいほど無頓着であったが、それでも葬儀の際、遺体自体に人為的に手を加えるのは嫌われた。聖書には、磔刑の3日後人々が気づいたときには、キリストの遺体は棺から消えていたと書かれており⁸、それゆえ、キリストは肉体を伴って復活し昇天したのだと説明される。ヤイロの娘やナインの若者、ラザロもまた、復活の際には肉体を伴っ

ていた。遺体が再び息を吹き返すというグロテスクなまでの描写は、キリスト者にとって最大の関心事の一つである、最後の審判の場面を思い起こさせる。すべての死者が墓から起きあがるという終末の時に、いったいいかなる光景が繰り広げられると聖書に書いてあるのか。次にそれを確認しよう。

2.2.1 善き者の天国、悪しき者の地獄

—— マタイによる福音書

新訳聖書『マタイによる福音書』(以下、『マタイ』とのみ記す)には、「最後の審判の様子」として以下のように記されている。

人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。「さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。(中略)」それから、王は左側にいる人たちにも言う。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。」⁹(下線は筆者による。以下同様。)

ここに記されている世界観を模式化して表現したのが図1である¹⁰。最後の審判の時が

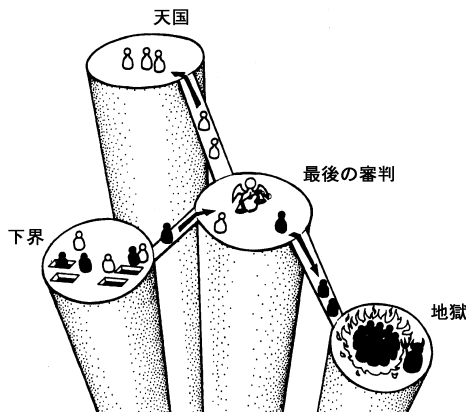


図1 『マタイによる福音書』の他界

来ると、すべての死者たちは死の床から起き上がり、裁きの場へと赴く。そこでは、生前の行いに従い、各々の行く先を振り分けられる。すなわち、善き者は天国へ、悪しき者は地獄へと送られるのである。両者の間の領域は存在せず、人は天国ないし地獄のいずれかで永遠の時を過ごすことになる。人は善悪のみに2分類される。しかし、裁きの場である最後の審判は、いったいいつどの時点で行われるのだろうか。『マタイ』にある記述を文字通り読みとけば、それは、世界が終わる時に

一度だけ行われるということになる。決して、各人が死んだ後、個人的に裁かれることはないのである。

こうした福音書にある世界観は、人々のうちでどこまで具体化され、受容されていたのだろうか。それを示す挿絵がパリ国立図書館所蔵の写本に残っている(図2)¹¹。「最後の審判」の様子が描かれているその絵の作者および製作地は不詳だが、15世紀に作られたということだけはわかっている。製作年代が比較的新しいため、中世の作品というよりむしろルネサンスの文脈で読み解くべきかもしれないが、ここで注目したいモチーフが的確に表現されている。あえてこの作品を見てみよう。

画面は2つのモチーフから構成されている。左側にみえるのは天秤を手にした正義の大天使ミカエル。人々の魂を計量し、善き者と悪しき者とを選び分けるのが彼の任務だ¹²。天秤の左側の人物は天使が、右側はベリアル(Belie/Belial)¹³とおぼしき悪魔が連行しようとしているのがわかるだろう。悪魔の側に傾いたときには、その死者は地獄へと引き立



図2 最後の審判

てられていくのだが、この場合、右側に乗せられている死者も左側の死者と同様に助かりそうだ。よく見ると、画面左上の天使が、聖ゲオルクよろしく、手にした槍で天秤上の人間を我がものにしようとしている悪魔に対し攻撃をしかけ、救出しようとしているからである。

絵の左側が天使すなわ

ち救済を表現していたのに対し、右半分には永遠の絶望とも言ふべき地獄の光景が描かれている。地獄の業火を象徴するレヴィアタン、「地獄の口¹⁴」がぱっくりと口を開け、その中に置かれた大釜では、悪しき者たちが灼熱に苛まれ焼かれ続けるという責め苦にあっている。なかには冠を戴く貴顕の姿さえ見られる。大釜内にいる一番左側の人物の背中を、悪魔が手にした錐のような道具で突き、痛めつけている。その悪魔の下には、臀部にも顔を持つ悪魔がおり、彼がふいごを手にして釜の火を炊き続けているので、火勢が衰えることはない。画面右上部にはさらにもう一人の悪しき者、「7つの大罪」の一つ「虚飾」を犯した女の姿が見える。あろうことか彼女は、この世の終わりにいたってもなお鏡を手にし、髪を結い上げようとしている。それを毛むくじゃらの悪魔は、容赦なく煮えたぎった釜の中に放り込む。

2.2.2 善き者、悪しき者、善くもあり悪くもある者 ——ヨハネによる福音書

『ヨハネによる福音書』（以下『ヨハネ』とのみ記す）においては、『マタイ』におけるそれとは若干異なる世界観が繰り広げられている。

そこで、イエスは彼らに言われた。「(中略)はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、子から命へと移っている。はっきりと言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やそのときである。(中略)驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子

の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ。
(後略)』¹⁵

最後の審判が行われるのが、終末の時に1度だけであるという点では共通しているものの、復活した者すべてが裁きの場に連行されるわけではないという点で、『マタイ』とは異なっている。『ヨハネ』に描かれている世界観によると、最後の審判に際して、人間たちは以下の3カテゴリーに分類されている。すなわち、第1のカテゴリーは「善を行った者」であり、彼らは墓から起き上がった後、裁かれることなくそのまま「復活して命を受ける」。第2と第3のカテゴリーは、生前「悪を行った者」たちであり、彼らは「復活して裁きを受け」なければならない。その裁きの後に、善を行った者同様に天国の門をくぐる事が許される者と、地獄へ送られる者へと分けられるのである。つまり、「善き者」、「悪しき行いをしたが、善き者」、「悪しき行いをした、悪しき者」に3分類されることになる。

この他界観を模式化したのが図3である¹⁶。図1とは異なり、死者のうち、「善き者」は裁きの場を経ずに天国へと至ることができるため、下界から天国への直通ルートが設けられている。それ以外の者はすべて裁きの場で裁かれ、そこで、少々の悪行を行ったけれど天国への入場を許可できる者と、許可されず、地獄へと送られる者へとふり分けられる。その結果、天国に入場している者たちの顔ぶれには、真っ白な者以外に、少々黒の混じった者もみられるのがわかるだろう。むしろ真っ黒な者は地獄へと送られ、彼らは、『マタイ』における場合と同様、業火の中で死後を永遠

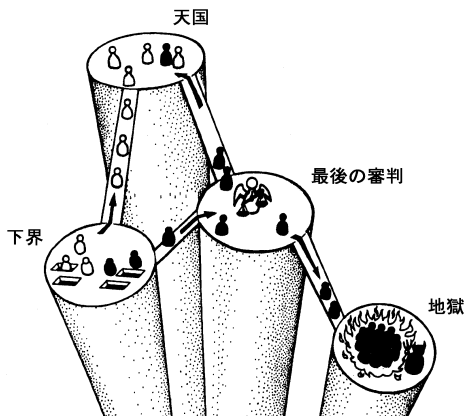


図3 『ヨハネによる福音書』の他界

の苦しみの中で過ごすことになるのだが。

フランスのブルゴーニュ地方に現存する代表的なロマネスク建築のひとつである、オートンのサン＝ラザール教会タンパンは、『ヨハネ』の世界観が図像化されている数少ない例のひとつである（図4）¹⁷。図像の最下段には、墓から立ち上がりつつある人々の姿がある。その一部、すなわち中央にあるキリスト像の右手側には、天使に導かれて墓からそのまま天国へと至ろうとしている人々の造形をみて

とることができる。彼らが裁かれることはない。キリスト像の左手側に刻まれているのは、「善き者」と対照的な「悪しき行いをした者」たちだ。彼らには裁きの時が待っている。そこには、手にした天秤で魂の重さを計量し、人々に救いの手をさしのべている大天使ミカエルの姿がある。彼のとなりに見えるのは悪魔の姿である。悪魔が天秤に人間の悪行を乗せ、まさに計量されている人の魂を我がものにしようと画策しているが、いささか分が悪い。天秤がミカエル側に傾いており、この人物は天国へと導かれようとしているからである。そして、地獄へと送られる者たちは、復活の時を迎え永遠の命を得たその後に、地獄の責め苦の中で永久に悶え苦しみ続ける。

3. 布教者の熟考：「煉獄の父」アウグスティヌスと、幽霊の胎動

興味深いことに、神は、死者が生前いかなる行いをしていたのかに鑑みて裁きを下すのだと説かれるものの、その裁きがはたしているのかについては、聖書は寡黙である。さ

らには、これまで見てきた終末の世界のなかに、本稿での主人公であるはずの幽霊の居場所はどこにも見つけることはできない。なぜか。平明にいってしまえば、初期キリスト教では自らを異教と差別化し、それと訣別するために、祖先の霊を弔うという古習を基本的に禁じたからである。たとえば、5世紀、キリスト教の信仰を弁証法的に合理化しようとしたアウグスティヌス

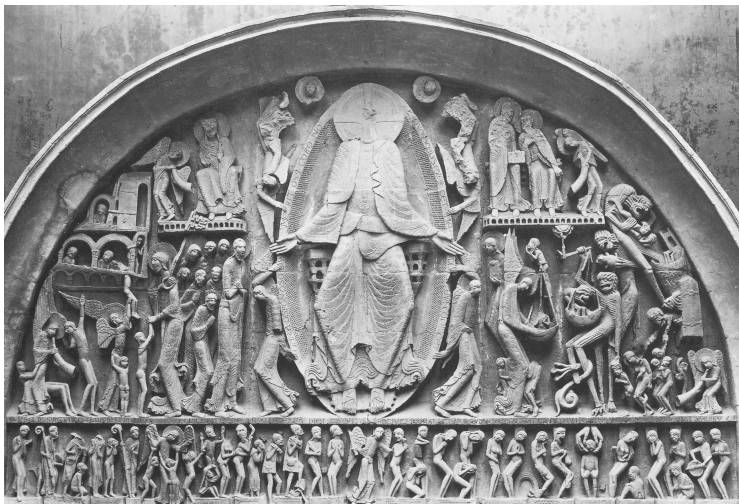


図4 オートンのサン＝ラザール教会ティンパヌム

スは、その主著『神の国』のなかで、キリスト者は異教の風習とどのように対峙すべきか、以下のように述べている。

しかしながら、わたしたち（＝キリスト教徒）は、そのような殉教者たちのために神殿を建てたり、祭司職や祭儀を定めたり、犠牲の供え物を捧げたりはしないのである。なぜなら、彼ら（＝殉教者）自身が神ではなく、彼らの神がわたしたちにとっての神であるからである。（中略）

しかし、たとえ殉教者の聖なる身体の上に建てられているとはいっても、神の栄光をたたえ神を礼拝するために建てられた祭壇の前に立ってキリスト教の司祭が、祈りの中で、「ペトロ、パウロ、キプリアヌスよ、わたしはあなたがたに犠牲を捧げます」というのを聞いた人がかつていたであろうか。なぜなら、殉教者たちを記念して礼拝が捧げられるのは神に対してだからである。そしてその神が彼らを人間とし、殉教者とし、天の栄光の中で聖なる天使との交わりに入らしめるのである。それゆえにこそ、わたしたちはそうした栄誉の中で、彼らの勝利に対して真の神に感謝を捧げるのである。そして、その神はわたしたちが神に助けを求め、彼ら殉教者たちの記憶を新たにすることによって、そうした同じような栄誉の冠と勝利を得べく、彼ら殉教者たちにまねるようにとわたしたちを鼓舞するのである。であるから、信仰者たちのどのような恭順が殉教者たちの墓前で捧げられようとも、それらは彼らに対する記憶を飾るためであって、彼らが神々であるかの

ように使者たちに対して宗教儀式を行ったり、犠牲を捧げたりするためではないのである。¹⁸

ここで彼は、異教徒たちが「あたかも神格であるかのように死者を取り扱っている」として、伝統的な儀礼をきっぱりと拒絶している。また、『告白』第6巻第2章では、敬虔なキリスト教徒であった母モニカが、それまで彼女が習慣として行っていた、聖者たちを記念して建てられた聖堂に供犠を捧げることを、聖アンブロシウスが禁止したと知るとすぐさま受けいれて、きっぱりとやめたと賞賛している¹⁹。

当時のキリスト教徒は、死者の葬儀を華美に営んでいたため、それをまるで異教徒のようだとアウグスティヌスは憂慮した。そして、遺族を慰めるのならば供養は最小限にとどめ、異教時代の葬儀の慣習は早く捨てるように勧告したのである。そして、死んだ者が生者の前に出現するという話についても、彼は聖書にはない新たな解釈を行う。それが如実に現れている「死者のための供養について（De cura gerenda pro mortuis）」という論文の当該部分をみてみよう。

世上、ある種の幻を見たという話が語られるが、それはこの議論に無視できない一つの問題を付け加えるように私には思われる。睡眠中や、これとはまったく別の状況で、生きている人の前に死者が姿を現したというのである。それを見た人々は、死者の亡骸が墓もないままどこに埋められているのか、その場所を知らなかった。死者は彼らにそれを教え、自分たちには欠けている墓を作ってほしい

と彼らに頼んだ。これに対して、そういう幻は虚偽であると答えることは、キリスト教の著述家たちの書き残した証言や、それを見た人々と断言する人々の確信を、臆面もなく否定することになる。これについては次のように答えるのが妥当である。すなわち、われわれに報告された事柄を、夢の中で死者たちが言ったり、見せたり、尋ねたりしているように見えるとき、死者がそれを意識し、かつ現実の存在として行動していると考えてはならない。生者もまた生者の夢に現れて、しかもそのことを知りもしないからである。（中略）

私としてはこうした幻については天使が介入していると信じたくなる。神の許しを得て、もしくはその指図に基づいて、天使たちがしかじかの死者を埋葬してやる必要があることを、夢見る人に知らせるのであり、しかもそれが、死者たち自身の知らぬ間になされるのだと。²⁰

アウグスティヌスは、死んだ者が夢に出てきて生者にメッセージを伝え、それが正しい場合があることまで認めている。しかし、生者に働きかけたのは死んだ者自身ではなく天使で、その介入があって初めて可能になったのだという部分で、旧来の祖霊に対する信仰とは一線を画そうとする。とはいえ、初期キリスト教の教義ではきっぱりと禁止されていた死者のための供犠が、その後、遠回しな表現ながらも肯定されていくのである。

こうして、問題がすべて解決された上は、死者に対するわれわれの供養のうち、死者は、祭壇に捧げられる犠牲やわれわれ

の祈りや施しの供えにおいて、彼らのためになされる大祈願の恩恵にのみ与るものと考えよう。ただし、（中略）これらの祈願もすべてのものに役立つわけではなく、ただ生きていたあいだにその利益を受けるに値した人々のみに役立つ、と。しかし、われわれはその資格を得た人々を識別することができないので、その恩恵を受けることが可能な、またそう推測される人々のうち誰ひとり洩れることのないように、洗礼によって生まれかわったすべての人のために懇願すべきである。なぜなら、われわれの慈善行為は、その利益に与ることができる人々に対して欠けるよりは、それが薬にも毒にもならない者たちのために空しくなされることの方がまだましだからである。とはいえ、誰しも近親者が自分たちのためにも同じようにしてくれることを期待して、彼らのために一層熱心に祈願するものである。²¹

死者のためのとりなしは有効だから、生者は死んだ者のためにミサと祈祷と施しをすべきである。のちに西方教会最大の教父と謳われるようになるアウグスティヌスのこの主張は、こうして異教的・土着的な風習を論理的な転位によって認めるものであり、それだけ一般に普及していったものと思われる。

4. 拡大解釈される他界の情景

4.1 幽霊の誕生

西方教会においては、こうした聖アウグスティヌスの確言以来、聖書の世界観はどんどん拡大解釈されていく²²。いずれにしても、とりわけ13世紀から16世紀にかけて、社会状況のドラスティックな変化にともなって他界

観が整備され、そして同時に、死後の世界をめぐる表現もまた多様に、具体的になっていった。

死後の世界を、聖書における記述にのっとったうえ、論理的整合性をもったものとして模式化しようと試みる者たちにとって、最後の審判が黙示録のときただ一度だけ行われるとしか読みとれない記述は、やがて、大きな疑問としてのしかかってくる。人はいつか必ず死ぬ。その後、死者たちは地の下で裁きの時を待ち続ける。人々は、埋葬され肉体が朽ち果てた後も、裁きの場が設けられるまで、長きにわたり、墓に横たわったまま時が満ちるのを待つ、という死後観に対しての疑問である。

これではいかにも不安定ではあるまいか。時が満ちるまで、なにも起きないのだろうか。信者にしてみれば、神の創りたもうた世界は完全な論理に満ちているはずである。こうして中世の宗教者たちにより、文字テキストから若干距離を置き、その不安定な時を鎮めるための新しい理念型が考案される。それが、図5にみるような精神と肉体とを分けて考える構図である²³。ここでは、死後肉体を離れた魂は、最後の審判を待たずにそのまま個別

審判の場面へと向かう。個別審判の場面で各々が裁かれ、行く先が割り振られる。「悪しき者」たちは地獄へ、「善き者」たちは天国へと送られるのである。キリスト教が成立する以前に生まれた異教徒や、洗礼前に死亡した乳児の魂は、辺獄での永遠の時が申し渡される。そして、生前悪事を働いたものの、永久に地獄で過ごすほどの大悪党ではない場合は、煉獄へと送られ、そこで天国へ至る前に浄化の炎に身を任せることになる。地獄と同様の業火であるものの、浄化の場としての煉獄は、同時に天国へ至る前庭でもある。前節でみたように、忠実に福音書にそった他界観においては、時間の経過というベクトルが入り込む余地はなかった。あるのはただ、最後の審判の時のみであり、各人が生命を全うした後に迎えるのは、永遠の極楽あるいは永遠の責め苦以外の何ものでもなかった。しかし、煉獄の誕生とともに、死後の世界に時間軸が発生する。1898年にエミール・マールがすでに指摘しているように、『実際、煉獄というのは時間の中にあるのであり、時の法則に従っている』²⁴のである。こうして死者はときに生者の住む世界にまで越境してくるようになった。彼らに取りなしを乞うために。そして、それを目撃した生者は言うだろう。「幽霊がでた」と。

煉獄の死者は火の中で両腕を高く挙げ、救済の時を待ち焦がれているように描かれることがしばしばある。たとえば、その一例が図6だ²⁵。この細密画が描かれたのは15世紀後半とされる。13世紀に編まれた、全7巻からなる『神学大要(コンペンディウム・テオロジカエ・ウエリタティス、Compendium theologiae veritatis)』の、数多くある写本のうち、メディンゲン(Medingen)のドミニコ会修道院版と

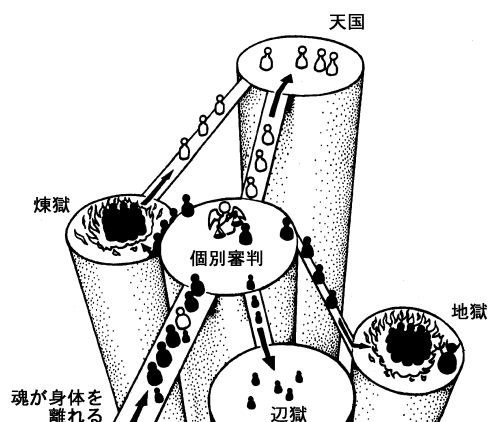


図5 煉獄が導入された他界(1)

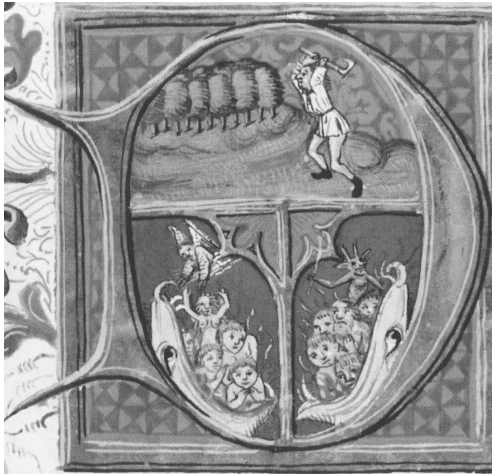


図6 『神学大要』「D」タイトル画

して知られるもので、ここで挙げたものは、第3巻「罪」の巻頭を飾る第64葉、「D」の項目のタイトル画だ。Dの文字の内側が、ゴシック教会の柱を思わせるT字形の縁によって三区画に区切られている。画面の上部には、鎌とおぼしき道具を手にして森林を切り開こうとしている男の姿がある。左右に区切られた下部は、どちらの区画にも例の「地獄の口」の中で焼かれている人々の姿がみてとれる。しかし彼らの頭上を飛行しているのが、右側が悪魔なのに對し左は天使であることから、右側には地獄の情景が、左側には煉獄のそれが描かれていることがわかる。そして天使は、罪深き人々のうちの一人、手を頭上に挙げる者を今まさに煉獄から救出しようとしているのがみられるだろう。厳密に言えば、現世と並行した時を刻む煉獄と、終末の日の後に訪れる永遠の業火による苦しみが同時に起こることはあり得ないにもかかわらず、この絵において煉獄と地獄は対照的な場として描かれている。こうして終末は骨抜きになっていく。

4.2 最後の審判の失墜あるいは相対化

この世の終わりに行われるという審判にスポットライトがあてられていた『マタイ』『ヨハネ』における他界観をみた私たちは、図5にあらわされている世界が一見美しい整合性を見せているようにみえながら、じつはそこには大きな欠陥が潜んでいることに気づかなければならない。つまりここには、「最後の審判」がないのである。煉獄という「罪を浄化する場」が設けられる前には、絶対的な威圧感をもって人間を凌駕し、締めつけていた最後の審判に、霊肉二分という建前のもとで個別審判がこっそりすり替わっている。

個別審判とは別に最後の審判を盛り込んだのが図7である²⁶。黙示録の時が満ち、最後の審判に際しては、天国にいる者も地獄にいる者も、個別審判で下された判決が覆されることはないにもかかわらず、最終判決を聞くためにだけ、ふたたび裁きの天使の前に呼び出される。こうして最後の審判は、もはや象徴的に設定された儀礼となりはて、かつての圧倒的な権威はまったく失われてしまった。個別の審判に移った判決権は、天の神の手から放れて生身の人間にゆだねられることとな

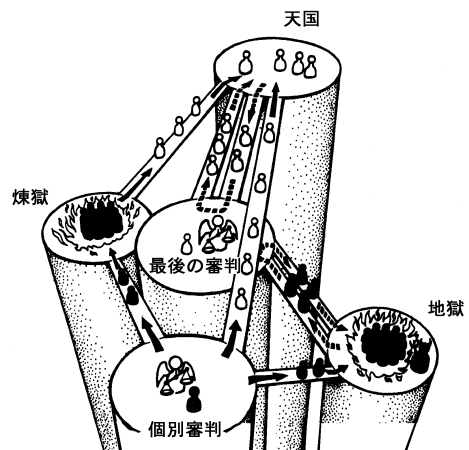


図7 煉獄が導入された他界(2)

り、それが数世紀をへて宗教改革への伏線ともなっていく。先に見た図2であるが、この「最後の審判」が描かれたのは15世紀、すなわち宗教改革が勃発する直前である。ローマ教皇を頂点とするキリスト教会は、似たような類の図像を利用して信者を脅し、終末観をあり、免罪符を販売し続けた。最後の審判と魂の救済。いまだ疫学が発達しておらず、ペストをはじめとする疫病に倒れ、あるいはその他の災厄で死亡する者も多かった当時、恐怖や神の恩寵を可視化する道具として、絵画は大いに利用されたのである。かくして頂点の地位を明け渡した最後の審判は、解釈されるためのテキストとなり、そこから創られたテキストこそが、新たな解釈の世界を創造するに至る²⁷。

5. 生ける屍と幽霊と

初期キリスト教に見られた死者の蘇りの系譜は、そのまま最後の審判における復活という系譜に受け継がれ、現代にまで至っていると考えられる。キリスト教社会では伝統的に土葬が好まれたのも、肉体が焼かれて灰になってしまうと²⁸復活に差し障ると信じられたからである。さすがに現在ではそういった理由付けを耳にすることはほとんどなく、火葬もかなり増加したが、敬虔なカトリック信者からは「できれば土葬の方がいい」という意見もしばしば聞かれる。19世紀後半ヨーロッパに登場した火葬は、当時はおもに宗教性からの意図的な離反を意味したものの、現在ではむしろ経済的な理由をあげる人が多い。

ともあれ、キリスト教徒にとってそういった意味で肉体は重要な要素なのである。その一方で、肉体を持たず、夢や幻視に登場するだけの幽霊。アウグスティヌス以後キリスト

教は、肉とは別に霊的なものが存在することに対しての信念も、肉体の重要性と同時に持ち続けている。死者への取りなしが認められて以来、幽霊はたしかに煉獄で焼かれている咎人であると説明される。しかし、そこには生々しい肉体性は欠如していた。というのも、本来霊肉二分の、霊の部分だけを切り出したのが幽霊だったからだ。

その後の段階で初めて、幽霊たちに、ラザロのような「腐肉の蘇り」と区別がつかないほどの肉体が付与されていく。たとえば「死の舞踏」。圧倒的な死の恐怖に直面したとき、本来アモルフなはずの感情が擬人化され、造形化されていく。そこからできあがった表現は、恐怖と向かい合う人々の情緒的反応をさらに高揚させ、ヒステリックなまでに信仰に没頭させただろう。もちろん背後には、キリスト教導入以前の民間信仰としてあった「生ける屍」の系譜という説明原理が地下水脈のごとく存在したに違いない。これをして、エリートたちの提供した宗教世界の間隙をつき、噴き出す口をめざとく見つけた民衆文化のたくましさととらえるか、それとも既存の準拠枠組みをこちら側の説明原理に換骨奪胎していった、キリスト教宗家たちの狡猾さととらえるか。その両方だろう。チャクラパルティ的な意味での「断片」の総体としての世界のなかで、民衆はよりパワフルな言説にまきこまれつつも、舵取りをし、ときに無意識のうちにかけひきに参与させられる。それはたしかに地道な営みだが、組み替えはいつか起こる。公認された幽霊たちが、それを証明してくれるだろう。

<以上>

注

- 1 Hoffmann, Heinrich: Zur Volkskunde des Jüricher Landes. 2.Teil: Sagen aus dem Indegebiet, Eschweiler, 1914, S.22, Nr.64.
- 2 事例については、Daniel Fabre: Le retour des morts, in: Etudes Rurales 105-106, 1987などを参照のこと。
- 3 杉崎泰一郎『欧州百鬼夜行抄』原書房、東京、2002、232頁。
- 4 下田哲「奇跡物語一覧」松本富士男(編)『図説歴史の中の聖書』燦葉出版社、東京、1987⁵、97-98頁。
- 5 新共同訳『マルコによる福音書』5、21-42。その他、『マタイによる福音書』9、18-19および『ルカによる福音書』8、40-56にも同じ事柄に関する記述がある。
- 6 新共同訳『ルカによる福音書』7、11-16。
- 7 新共同訳『ヨハネによる福音書』11、1-44。
- 8 『マタイによる福音書』28、2-8、『マルコによる福音書』16、5-8、『ルカによる福音書』24、3-7。
- 9 新共同訳『マタイによる福音書』25、31-43。
- 10 Jezler, Peter: Jenseitsmodelle und Jenseitsvorsorge. Eine Einführung, in: Gesellschaft für das Schweizerische Landesmuseum (Hrsg.): Himmel, Hölle, Fegefeuer. Das Jenseits im Mittelalter, Wilhelm Fink Verlag, München, 1994, S.14
- 11 Akoun, André: L'Europe, Brepols, Paris, 1990, p.169.
- 12 「魂の計量」、すなわち善と悪との最終的な比較というモチーフは、西ユーラシアに広がるオリエント／オクシデント世界に伝統的にみられるもので、元を辿ればゾロアスター教起源であるとされる。キリスト教で天秤は「公正さ」を象徴し、しばしば教化に際して利用されてきた。
- 13 ベリアルとは元々ヘブライ語で「役立たず／ろくでなし」を意味し、ユダヤ教のアポクリファにしばしば登場する、悪魔の別名である。『コリントの信徒への手紙2』6、15にはキリストとベリアルとが並列的に書かれていることから、すくなくともここでは現在サタンと理解されるものの別名として用いられている。ベリアルは庶民の間にも伝わり、たとえば16世紀アウグスブルクの鉄砲鍛冶ツィンマーマン(Zimmermann)は、「ベリアル」の語から「ベリアリア(Belialia)」なる新語を造り、そこでは「魔法の薬」の意として用いている。Jacoby, A: Belial, in: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd.1, Walter de Gruyter, Berlin-New York, 2000, Sp.1027 (1927年版のリプリント)
- 14 「地獄の口」が美術史的にどのように展開していったかについては、ロバート・ヒューズ(山下主一郎訳)『西欧絵画に見る天国と地獄』大修館書店、東京、1997、194頁以下に詳しい。
- 15 新共同訳『ヨハネによる福音書』5、19-29
- 16 Jezler, op.cit. S.14
- 17 Jezler, op.cit.S.15
- 18 アウグスティヌス『神の国』第8巻第27章(茂泉昭男他訳『アウグスティヌス著作集』第12巻、教文館、1982、233-234頁)
- 19 『告白』第9巻にも、死者供養をやめるように言及がある。
- 20 ル・ゴッフ, ジャック(渡辺香根夫・内田洋訳)『煉獄の誕生』法政大学出版局、東京、1988、119-120頁。
- 21 前同書、122-123頁。
- 22 ルメートル, ニコル他(蔵持不三也訳)『図説キリスト教文化事典』原書房、東京、2002²。
- 23 Jezler, op.cit. S.19
- 24 マール, エミール(田中仁彦他訳)『ゴシックの図像学(下)』国書刊行会、東京、1998、238頁。
- 25 ヴュルツブルク大学図書館蔵、Gesellschaft für das Schweizerische Landesmuseum (Hrsg.), op. cit.S.289
- 26 Jezler, op.cit. S.19
- 27 アリエスは、「最後の審判」解釈の精緻化は、中世前半の普遍的・共同体的な理想と、近代的思考ともいえる個人主義との妥協の産物であるとする。アリエス, フィリップ(福井憲彦訳)『図説 死の文化史』日本エディタースクール出版部、東京、1990、231頁。
- 28 ヨーロッパでは遺体を焼く際遺骨を残すことにこだわらないため、炉の燃焼温度が日本より高く設定されている。そのため火葬の後遺族のもとに残るのは、壺一杯の灰である。